

1. はじめに

山口県立大学 国際文化学科 岩野雅子

「今回のスタディツアーで一番変わったのは、先生ですね!」。スタディツアーでお世話になった佐伯さん、安藤さんからいただいたお褒めの言葉だ。この言葉に、「はい、そうです。」と素直にお礼を言いたい。タイ北部のホイプム村での滞在は、これまでのスタディツアーとは異なるカルチャーショックがあった。水道も電気もない村で生きる人々と数日をともにするなかで、「すべての人間の数だけ世界の中心がある」という言葉が現実のものとして感じられるようになった。

とはいえ、ホイプム村に入る山道では、トラックに揺られながら「ここまで来たこと」を後悔した。車がスリップして、学生もろとも谷底に落ちたらと冷や汗をぬぐった。ラオス国境の山登りの道では、切り立った崖の先から学生を見失ってしまうのではないかと冷や冷やした。わずか一歳の時に父親の背中におわれてラオス側から川を渡って逃げてきたという通訳兼プロジェクトコーディネーターのジッポンさんの体験談、ホイプム村でソーラーシステムの開通式を盛大に祝った夜に、ラオスから山を越えてきた人々にシステム一式を盗まれてしまったという話…。人間はどんなところでも生きていけるのだという思いと同時に、人の力ではどうしようもないことが数多くあるということが実感できる現場だった。

特に印象的だったのは、ホームステイ最終日の振り返りのセッションであった。「私たちは毎日毎日働くことだけで、楽しいことがあまりないけれど、今回学生さんたちが来てくれて、餅つきとか狩りとか、みんなで楽しいことを一緒にできたのが本当に良かった。」一年に一度の楽しみ(お正月)以外にはこれといって娯楽のない村人の生活と、私たちの生活との落差の大きさを目の当たりにさせられる言葉だった。「日本にはいろいろな物が何でもそろっているし、学生のみなさんは日本に帰ったら何でもできるのだから、がんばって勉強して、良い仕事についてください。」村人のほうが私たち日本人の立ち位置を十分理解しており、心配してくれていた。

ホイプム村の中には川が三本流れていた。裸足で川を渡り、隣の家に行った。川で洗い物をする人の姿も見かけた。毎日夕方にはスコールが降り、穏やかな川の流れは濁流と変わった。足を取られると、一気に流されて命はない。ゴウゴウと音を立てて流れる水を前にし、すぐその家に帰れない。日が沈むとロウソクの灯りが頼りだった。朝はニワトリの声で気持ちよく目覚めた。

ホイプム村を囲む山も、タイ北部の山々も一面、バイオ燃料にするトウモロコシ畑だった。転げ落ちそうな急斜面で連日農作業に追われる山の民がいた。その山は、タイ、ミャンマー、ラオスにつながっている。山のあちこちに同じような村がいくつもある。シャンティ山口では地球環境基金の助成金を得て、向こう三年間をかけてホイプム村50軒の家のすべてにエコトイレをつけ、命の森(アグロフォレスト)をつくる計画を進めている。

事業の成功の陰には、シャンティ山口の日本人と現地職員、ホイプム村の村長・長老・村人たちの、「子どもたちの未来への願い」があった。グローバル化の波にのまれる現在の生活から、いかに未来を切り拓くか。

“どの地域にも当てはまる課題があった。”



ホイプム村全体



トウモロコシの種まきの準備(農薬の散布)

2. 日程

8月30日(月) 福岡空港国際線集合

TG649 11:45 発、バンコク経由、18:25 チェンマイ着。
ホテルチェックイン後、チェンマイのナイトマーケット等散策。

8月31日(火) チェンマイ発、慶応大学生3名と合流後、センサイ村へ。

保育園を訪問し交流会。チェンカムのシャンティ山口事務所着。

9月1日(水) ラオス国境のプーサン・プチファー見学。

9月2日(木) トラック2台でホイプム村へ入る。ホームステイ開始。

9月3日(金) ホストファミリーのプログラム。交流会。

9月4日(土) ホストファミリーのプログラム。

9月5日(日) ホストファミリーとの振り返りの会。シャンティ学生寮へ。交流会。

9月6日(月) チェンラーイ(ドイツン寺院、ゴールドントライアングル見学)、空港へ。
チェンラーイ発バンコク行き搭乗。

9月7日(火) TG648 バンコク発、8:00 福岡空港着。解散。

3. タイ訪問の目的

- ・山口県で活動をする NGO 団体について知ること。
- ・事前学習会(7月24日、25日)に参加し、援助することについて考えること。
- ・「援助する側・される側」について、事前学習会で学んだことを実際に現地で体験しながら考えを深めること。
- ・学んだことについて、事後学習会(9月25日)で報告し、NGO 関係者と意見交換をすること。
- ・山口県で活動をする NGO 団体について理解を深めるとともに、行動する側に回るといふ視点に立脚できるようになること。

4. スタディツアー参加者

シャンティ山口事務局長：佐伯昭夫、山口県立大学教員：岩野雅子、山口県立大学大学院2年生：安藤公門、山口県立大学学部生：板垣成美・佐藤汐莉・平岡美佳子・福元徹・坪谷純希、山口大学学部生：久保貴大、読売新聞社記者：小笠原瞳、慶応大学学部生：間中倫平・近藤陽香・佐々木綜太郎



ホイプム村(村人全員によるお餅つきでの歓迎)



シャンティ学生寮での農作業のお手伝い(自給自足の畑)

5. 参加者からの感想文

NGO ネットワーク山口のスタディツアーに参加して

山口県立大学国際文化学部 国際文化学科2年 板垣成美

1. 「スタディツアーに参加する前と後を比べても自分の変化について」

スタディツアーに参加する前は、実際に現地に行き、あらゆる感覚機能を使い研究する実感が全くわかず、ただ単に自分の「そのとき」の視野に頼るほか為すすべがなかった。しかし8月30日から、実際にタイの地に足をつけ、タイの空気を吸い、タイの景色を眺め、タイの文化にふれてみることによって、今までの想像していた、自分の中の「タイ」を打ち破ることができた。

9日間という短い期間であったために、“本当のタイ”を見ることはできなかったかもしれないが、この短時間で、自分以外の人々と接することによって、考えや視野が広がったのは事実だ。

私の中のモン族のイメージは、貧困に苦しんで、お金を恵むくらい皆痩せ細っており、栄養失調である、というように、見てもいない、自分勝手な妄想を巡らせていた。しかし実際は、陽気な性格で、標準体型であり、私の中のイメージを良い意味で壊してくれた。“シャンティ山口”の会員として参加したこともあり、村人からの信頼も厚く、ホームステイ先では快く歓迎してくれた。そういう意味では、援助する側の意識や立場の必要性を、身をもって知る、機会であった。



モン族の刺繍

2. 「スタディツアーに参加して考えたこと」

参加してみて、第一にトイレが悩みの種であった。もちろん衣食住に関していえば、日本と異なるということは明らかであるが、それ以前に日本のトイレの設備がどれだけ十分に衛生的か肌で感じた。タイは発展という面では先進国に確実に追いつきつつあるが、衛生面の観点からいえば、日本で20年間暮らしている私にとっては、不衛生極まりなく、常に身の心配をしていた。

保育園を見学した際、園庭には菓子の包装紙が無造作に捨てられており、室内には泥、蟻が点々と存在している状態だった。それがタイの魅力の1つなのかもしれないが、快く思うものは指折り数えるほどしかないはずだ。



トイレのガスタンク

“シャンティ山口”が力を入れているトイレは衛生的向上におおいに役立つと、実際に現地に行ってみるにより、スタディツアーに参加していただくことで、感じる事が可能なものとなり、より支援を向上していくべき課題を身につけることが出来た。(日本を全て真似るのではなく)

3. 『「援助する側・される側」について』

事前学習で学んだことと、現地で体験したことを総合して、今、自分が言えることについて』

事前学習のときは、支援することは相手の役に立つものだと思っていた。なぜなら日本人観光客をみると、金品をねだり、物乞いをする子供や大人が多いという事例をよく聞いていたからだ。ところが、実際は私たちが差し出したものを必要としない傾向があった。例を挙げてみると、布団、懐中電灯、蚊取り線香だ。布団は既に数を必要とせず、懐中電灯は電池が消耗品であるため使えなくなることを知っており、予備の電池と共に返却された。蚊取り線香に至っては、違う家の人にあげていた。そこで自分は支援しているつもりであっても、相手にとっては、有難迷惑な行為に感じてしまうことがあるということが理解できた。

援助“される側”の顔を自分の視覚を使って見ることで、分かることが数多くあることに気付いたスタディツアーだった。



ホストファミリー

2010/09/25

NGO ネットワーク山口のスタディツアーに参加して

山口県立大学国際文化学部 国際文化学科2年 佐藤夕莉

今回初めてスタディツアーというものに参加した。その名の通り本当に色々な体験をさせてもらい、色んな活動をみたり人間をみたり文化をみることができた。

また、支援についての考え方も変った。タイに到着した時は、不安ばかりだった。しかし、一緒にいたメンバーと思楽しくナイトバザールで買い物ができとても楽しかった。2日目からは本格的な内容になったと思った。

シャンティ山口の office に泊まり、いろんな場所に案内してもらった。



ホストファミリーと

ラオスとの国境付近や、滝、支援している幼稚園などに行き、説明をうけてとても多くのおおくの活動をしているのにびっくりしたのが本音だ。

幼稚園には2か所行ったがタイの衛生状況をどうにか良くしようと働きかける活動は大切なことだと思った。初めに行った幼稚園では村長さんに会うことが出来た。今気がかりなことは、農薬のことだと聞いた。それを聞いた時以前、佐伯さんや安藤さんが言っていた農薬の動画をネットで見て、村人が農薬の怖さを知らないこと、その会社の思うままに動かされた村人が大勢いることがとても悲しかったのを思い出した。こういった問題がまだまだたくさんあるのだと痛感した。

エコトイレを実際みることができた。村人と作ったトイレはとても効率がよい仕組みになっていて衛生環境が良くなったと聞いた。実際のトイレをみるときれいに使われていた。

モン族の村に入った時は、最初電気もなく、お店も小さいのが1件しかないときいて3日間生活していけるのだろうかと不安ばかりであった。不安だらけでホームステイ先のお母さんに会ったが、お母さんがとても優しくほほ笑んでくれたので心配がすこし和らいだし、子供のソンもとても私に興味津津だったのでこれからの3日間に期待がわいた。

家についてからは衣裳を着たり、刺繍について色々質問をしたり、近所の子供と追っかけっこをしたりお父さんとタイ語の練習をしたり言葉は通じないが有意義な異文化交流が出来た。

また、彼らの畑に片道約40分かけていったが、これを毎日やっていると聞きとても驚嘆した。

モン族の方々との交流会では、伝統的な踊りや民族楽器、色鮮やかな衣装をみることができて本当に楽しい時間だった。お別れはとても悲しかったが、実際に少数民族の方々と交流し、タイの文化にふれることができてとても面白い経験になった。

この9日間は私にとってとても意味のあるものだった。タイについて“支援とは何か”について実際に参加、体験してみたくさんのことを知ることができた。



ホストファミリーのみなさんと



シャンティ学生寮での意見交換

2010年9月16日

NGO ネットワーク山口のスタディツアーに参加して

山口県立大学国際文化学部 国際文化学科2年 平岡美佳子

今回シャンティ山口に会員としてこのスタディツアーに参加した主な動機は大学に入る前から国際協力に興味があり、実際現場を訪れて援助する側、される側両方の観点をやしない、そこから自分なりに国際協力について考えてみたいと思い参加した。

このツアーでは、シャンティ山口の行っているエコトイレ事業、また6年前に終了した保育園支援事業を見ることができた。特に私が興味を持っていた保育園事業については、センサーイ村の保育園を訪れ、そこで働いている保育士さんや村の村長さんに話を聞くことができた。



近年タイでは保育士になるためには資格を持っていることが必須条件となっている。そこで現在は猶予期間ということで、資格を取るために土日に大学へ行っているそうだ。また、このセンサーイ村の保育園はタイの保育園の模範となっている。センサーイ村の村長さんは「保育園ができたことによって親は働きやすくなった。」と語っていた。現在ではこの保育園についてはタイ政府に委託している。

そして、ツアーの最終日にシャンティ山口の運営しているシャンティ学生寮にお邪魔した。モン族、リス族、アカ族などの子どもたちがこの寮に下宿し中学校、高校に通っている。どの子も笑顔で私たちを受け入れてくれた。タイ語だけでなく、中国語、英語が話せるので、夜中まで将来の夢や日本のこと寮での暮らしのことをたくさん話してくれた。みんな国際協力や教師など明確な夢を持ちその夢へ向かい仲間と一緒に努力していることが感じとれた。

3泊4日という日程で、ホイプム村にホームステイをした。このホイプム村はシャンティ山口がアグリフォレストリーや農作物の転換、エコトイレの普及等の援助を目指している村である。ホームステイ先はほかの家とは違いコンクリートで作られていた。また、テレビもあり、ご飯を食べたあとにはタイのドラマを見せてくれた。この電気はソーラーパネルで発電している。ホームステイ1日目で発熱した私にお母さんはおかゆを作ってくれた。この後、体調を崩したため最終日までホストファミリーと一緒に過ごすことはできなかったが、最終日に民族衣装を着せてくれたり、夜は指差しの本を使って会話を楽しむことができた。私のホストファミリーは若い夫婦で、お母さんは村の保育園で働いていた。この村は行政の村として認められていないため、保育士の資格は必要ない。他の家庭では、男性たちと一緒に農作業をしにいく女性が多くみられた。

村では生活のいたる部分で工夫がされていた。農作物の中心となっているトウモロコシ。その芯は薪がわりに使用していた。調理はすべて釜を用いて行われており、薪や炭の代わりに燃料として使われていた。2日目の交流会でふるまわれた餅は、バナナの葉につつまれていた。このバナナの葉には抗菌作用があり、3日はもつと

いうことでお土産までもらった。この村の人たちにとって一番の楽しみはお正月だそうだ。餅つきやケーンという楽器を演奏し、民族衣装に身を包みごちそうを家族みんなで食べる。昔の日本のお正月に似ているなど感じた。

このスタディツアーに参加して国際協力や援助する側、される側について前とは違った考えをするようになった。シャンティ山口の事業を見たり、日本のスタッフと現地のスタッフのやりとりを見ていてしっかりとした信頼関係が作られていると感じた。

だからこそ、一方的な支援ではなく、現地の共同体の習慣や伝統を変えることなく、地域に根付いた支援がされていた。ただ単に日本の技術を持ち込むのではなく、支援する地域にあった支援をすることの大切さを身をもって感じた。

特に、「豊かさ」や「貧しさ」の考え方が変わった。ホイプム村にホームステイしたり、現地の人と話したりすることで、この2つを自分の指標だけで決めつけてはいけなかったことが分かった。このことにより、人それぞれの豊かさがあるのだから自分の生活での豊かさ近づける支援でなく、現地の今ある生活を基にして問題を現地の人と一緒に解決したり、新たな技術を伝えることが本当の支援なのかなと、支援のありかたに対する考えが一番の変化だと思う。また、自分が大学で勉強できていることに感謝の気持ちを持つことができるようになった。

最後に、「援助する側、される側」については、援助する側は自分の価値観だけで援助の方法や援助自体を決めてはいけない。

シャンティ山口のお話や村の人と現地スタッフのやりとりをみて、現地の共同体や伝統を変えることなく支援しておられることがわかった。

事前学習のときは、できるだけたくさんの支援をすることやよい支援をすることが大切だと思っていたが、実際の支援の現場をみると、支援するのと同じくらい、そこまで至る過程が大切なのだと気づいた。

“**現地の人たちの信頼があってこそ、支援が受け入れられる**”のだということに気づいた。



ホイプム保育園



ホストファミリーの保母さん

NGO ネットワーク山口のスタディツアーに参加して

山口大学 一年 久保 貴大

今回のツアーで私は初めて海外に飛び出しました。

ツアーに参加することで自分の中で何か実感をもって変化すると思っていましたが実際はあいまいなものでした。

ホームステイと学生寮の滞在で言葉の大切さを感じたのと同時に言葉が無くても意思を交わせることを学びました。

またモン族や学生達との交流会では彼らの個性の強さを感じました。

一人何か一つは特技を持っており、とても驚きました。

ツアーを通して外国語への関心と、技術を身につけ個性を大切にする気持ちが一層深まりました。

モン族と日本人との経済的格差はとても大きく、さぞ生活に苦勞をしているのだろうと考えていました。しかし彼らに不便さを感じている様子は無く、見る限りではとても幸せそうでした。むしろ不便な分、彼らは様々な知恵や技術を持っており、とてもたくましさを感じました。学生寮の生徒達に関してもとても明るく、日本の学生よりいきいきしていました。

事前学習の内容で『経済的に厳しい村にどのように支援をするか』と言う問いに対して『何もしないという』選択肢があったことがとても印象に残っていました。

いくら私達が同情しても、彼らにはその理由がわからないそうです。生きるために必要な環境と、自立して稼ぐことのできる環境が整える加減がとても難しいと思いました。

例え貧しくかったり不便だったりしても彼らはとても幸せそうでした。

支援を行うにおいて、現地の住民にとって“「幸せとは何か」を理解すること”が重要であると感じました。



ホストファミリーと



ケーンの舞

シャンティ山口のスタディツアーに参加して

慶應義塾大学 総合政策学部4年 近藤 陽香

微笑みの国、タイ。初めてタイに来た私がこの言葉を実感したのは、今回のスタディツアーに参加した時だった。私が見た微笑みは二つ。「モン族の人々の微笑み」と「シャンティ山口のスタッフの方々の微笑み」である。

タイに来ることすら初めての私にとって、モン族の人々がどのような暮らしをしているのかを想像することは簡単なことではなかった。だからこそ、実際にホイポム村を訪れてモン族の人々とコミュニケーションを取る前は、「貧しくて、疲弊した生活を送っているのだろう」という単純な想像しかできなかった。



しかし、いざ村に赴き驚いたのはモン族の人々が笑顔で暮らしていたということである。こちらが挨拶をすれば、必ず笑顔で応えてくれた。その笑顔を見ると、自然とこちらも笑顔になるから不思議である。

スタディツアーの間、私は風邪をひいて熱を出してしまっていたが、彼らと少しでも触れ合うことで元気をもらうことができた。

そして、交流会の日は本当に楽しかった。村中が笑顔で溢れかえっていたといっても過言ではないのだろうか。一緒に餅つきをしたり、作ってくださった美味しい料理と一緒に食べたり、モン族と日本の文化を紹介するような出し物をしたり……。私が初めに想像していた「疲弊した生活を送っている」というイメージは払拭された。確かに、この村には日本のような便利な生活はないけれども、人々は毎日を笑顔で暮らしていた。ここに私はタイの「微笑み」を感じることができた。

モン族の人々だけでなく、シャンティ山口のスタッフの方々もいつも笑顔で参加者のお世話をしてくださった。前述の通り、私はスタディツアーの間に風邪をひいて熱を出してしまっていた。

スタッフの方々はただでさえお忙しい中、私を病院まで連れて行って下さり、長い時間付き添いをしてくださった。また、私達のために毎日美味しいご飯を作ってくれていた。しかも、嫌な顔一つしないので驚きである。「ありがとう」と言うと、いつも笑顔で「大丈夫ですよ！」と応えてくださった。モン族の人々も同様だが、初めて会った私達に対していつも笑顔で接して下さることが、単純にとてもうれしかった。

「微笑みの国」というキャッチフレーズは、タイの特徴を表すものとしてよく耳にするが、どうしてこう呼ばれているのか分からなかった。しかし、今回のスタディツアーに参加し、タイに住む人々は、人に対して作り笑いではない本当の笑顔を見せてくれる人達なのだと思った。そして同時に、この微笑みは強さと表裏一体であるのではないかと感じた。

モン族の人々も、スタッフの方々も決して裕福な暮らしをしているわけではないと思う。厳しい生活の中で、“それに負けずに強く生きようとしているから”こそその笑顔なのではないだろうか。

2010.09.

シャンティ山口スタディツアーに参加して

慶應義塾大学 総合政策学部2年

間中 倫平

18歳の春に、僕は初めて一人で一ヶ月海外を旅した。何もかもが新しく、脳みそがグルグル回ったのを覚えている。それから12年、海外生活も経験したし、一人旅にもすっかり慣れ大抵の異環境にも適応したつもりでいた。だから、特にモンの人々との時間のなか、グルグル回るあの感覚を久しぶりに感じて懐かしみを覚えたのがちょっと意外で嬉しかった。



ホストファミリーと魚釣り

アジアは大好きだ、けれど東京で生まれて育っているから、土は実は馴染まない。

外は泥か土で、家の中も土で、だからいつも土の上。周りからは僕の見え目が野生化されているように見える(らしい)だけで実はとても肌が弱く蚊や虫は大嫌いだ、聞き慣れない言葉に耳の筋肉疲労を起こして、食べ慣れない食事にダイエット成功の予感も日々感じていた。

屋外の水シャワーをパチャパチャ浴びて、ビーチサンダルのかかたが泥をふくらはぎに跳ねかさないようにと気を付けながら半歩ずつタオルを目指した。寝床は竹でできた高床式みたいな小屋で、床に敷いた竹の間隙から水のペットボトルがよく転げ落ちた。屋根はトタンだったが、ひどい雨の夜にトタン楽器となり、そしてそんな時はアヒルも鶏も床下に雨宿りに来るから、何デシベルか分からないままの朝を迎えた、楽しかった。こうやってグルグル回る時、僕は自分に向き合えて、自信と自尊と挫折と嫌悪を味わい、少しの成長を感じ取る、その感覚をこのツアーで久しぶりに感じる事が出来た。多くの学生に参加して欲しいツアーだ。

“自然て？人間て？って、”ただ来ただけでも貴重な経験になる。けれど、もっと濃密な時間にも自分自身で、自分次第でどうにでも出来る。人に優しくすること、感謝すること、周りの友人や参加者から良いと思う所を真似して参加中に自身の行動として移してみることに、ゴミを捨てること、言葉が通じなくとも周りの人とにかく話しかけてみることに、そういう簡単な事でもいいのかも知れない。きっと帰国してからも生きるスキルになるはずだ。そういう機会もここにある。

このツアーに参加したら、一日は体調を崩すかもしれない、熱が出たり、風邪をひいたりするかもしれない、けれど、それほどの自己の日常からの変化を受け止められるチャンスもそう多くない。

いつも海外に出ると思う、僕は身体が弱い、精神的にも弱くて、怖がり、周りに溶け込めずに尻込みし、それを寝る前にそっと反省したりして、でも、良い時間だなんて。

日本や現地のスタッフの方や村の人々や他の参加者のみんなに感謝を伝えようと思うのは、“みんなの中に自分があった”と思い返すからだ。期間中、多くの事を学んだし、多くの人に助けもらった。けれどこれからは年齢的にもTakerでなくGiverにならないとそんな事を考え続けたスタディツアーだった。

みんなに、ありがとうございました。



山に狩にも行った



ホストファミリーと



シャンティ学生寮で

平成22年9月.

シャンティ山口スタディツアーに参加して

山口県立大学 国際文化学研究科2年 安藤公門

今年3月につづく2回目のホイプム村の訪問だった。前回見えないことがよく見えた。

- (1) トウモロコシ畑の様子。遺伝子組み換え農業の実際。トウモロコシ以外にない山の斜面。想像以上に進行している。
- (2) 日本の農山村との類似と相違をみる切り口が見つかった。着いてすぐイノシシ捕獲のあと親戚・近所で食べあう習慣。交流会での餅つき。
- (3) スタッフのジュポンさんの話をまとまって聞くことができた。その中で「モンは、山が好き」「山に住むことを一番いいと思っている」ということばを聞いた。モン族の文化や生活習慣に対する誇りを強く感じた。



ホイプム村の農地と住居

中村尚司著『豊かなアジア、貧しい日本』という本を持参して読みながらツアーを続けた。経済的には貧しいアジアが、経済的には豊かとされる日本（先進国）に対して、人間らしい生活、持続可能な社会を作っていく上で、アジアから学んでゆくべきだという視点で書かれた本だ。実際にはどうなんだろうか。経済的な貧しさの固定（格差）にならないか、自然の中で自然に寄り添って暮らしている人々の暮らしの知恵に未来社会の根源的なあり方がはらまれているのか、そうだとするとそれをどのように生かしてゆくのか。遺伝子組み換え農業との対峙とトイレ・衛生事業に問題を絞ってさらに考えていきたい。

今後のツアーのために次の点が重要だと考える。

- ・ホイプム村（モンの村）を知ること、その日常生活と歴史などを学ぶことは、ホームステイや交流会が大きな役割を果たすし、とても大切なことだと思う。
- ・その上で参加者に、ホイプム村の抱えている問題とシャンティ山口との共同の事業で解決しようとしている問題の共有を事前準備で図る必要を感じた。
- ・慶応大学の学生3名は、1ヶ月の時間を調査にあてていた。長いだけがいいとは思わないが、半年、一年と腰をすえてかかることも必要だと思う。タイ北部国境からラオスにかけてモン族の歴史と今の生活、焼畑の荒廃・遺伝子組み換え農業からの脱却の課題は、その深さをもっている。

遺伝子組み換えのトウモロコシの畑の現実、想像以上だった。前に見たときは、村の山の頂上に近いところを焼いていた。到着したときにも火の手が山を覆っていて、驚いたが、今度は、村に通じる道路脇、住宅からすぐ側の山まで焼かれていて、斜面一面にすでにトウモロコシが植えられており、成長の度合いは畑によりちがっていたが、背を伸ばしていた。村の畑にはトウモロコシしかないのか、と言ってもおかしくない風景になっていた。

村の人は勤勉である。斜面に道を作り、バイクや徒歩で籠に作業道具を積んで離れた畑に通う。案内してもらった3~4キロ離れた別の谷間でもぎっしりとトウモロコシを植えつけていた。ところどころにタンクがありホースが延びている。モンサント社指定の購入させられた農薬が溶かされて溶液として入れられている。播種の前、成長期の一時期に撒くように指示され、その通りに行っているという。以前、この地域で盛んであった果樹・ライチの一種の果樹園が部分的に焼かれずに残っているところがある。ぽつんと島状にトウモロコシ畑の中に残っている。そこには農薬が撒かれない。そのため樹の下は、茅、イラクサなど普通に生えている草が緑をつくっている。トウモロコシの畑には、トウモロコシ以外には見えない。近づいてみるとわずかにミントが弱々しく芽を出しているのみだ。

土地利用のあり方としてとても危惧を感じる。大雨・洪水で土砂崩れを招くことを恐れる。**村との共同事業、アグロフォレストリー事業は、本当に求められている事業である。**

平成22年9月